若越郷土研究　二七巻二号

獅子渡り―福井市本堂町

杉原丈夫

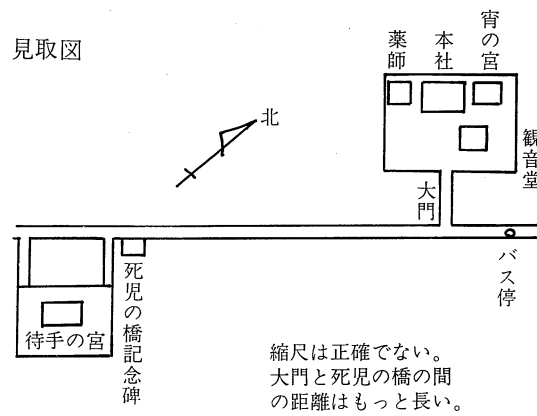
高雄神社

福井市本堂町高雄神社の祭礼は十月十二日および十三日である。獅子は十二日の昼神社を出発、郷内を渡御して、夕方お宮にもどって休息し、夜ふけてから御旅所へ渡御、そこで一泊して、翌日昼神社へ帰る。

本堂町は、福井市とはいえ、昔の丹生郡西安居(あご)村で、福井市まるせんのバス発車場から西安居線に乗って三十分ほどかかる。本堂のバス停で降りて少し歩くと、高雄神社の大門が見える。人の身長ほどある大きなちょうちんが左右に門のようにある。ちょうちんには「高雄神社」と大書してある。

わたしが着いたのは十二日の夕刻であった。あたりはすっかり暗くなっていて、軒々の神灯に火がはいっており、人通りもなんとなく多く、小さな女の子たちは晴れ着を着ていて、お祭り気分がただよっていた。まず区長の池田熊蔵氏の宅を訪れた。池田氏の宅は大門の近くにあり、家のいみ名もダイモンというそうである。

見取図



それからまっくらな参道を登って神社に参拝した。翌日の昼もう一度明るいときに参拝した。高雄神社の構成は少し複雑なので説明を要する。石段を登って正面にあるのが高雄神社の本社であり、その左右に小社がある。向かって左の方が薬師堂であり、右の方を宵(よい)の宮という。石段の下の右手にもう一つ小社がある。これは観音堂である。つまり本社とも四社あることになる。このほかずっと離れた所、村の西のはずれに別に一社があり、待手の宮（松手の宮とも書く）という。

本社の祭神は三柱あって、中央が高雄大権現、右（向かって左）が白山権現、左が越智権現である。『越前国名蹟考』では、中央が白山権現、右が高雄権現となっているから、いつのときか高雄権現と白山権現が入れかわった。しかし本尊は泰澄大師作の十一面観音で十七年に一度しか開帳しないというから、やはり本来の主祭神は白山権現であろう。

『越前国名蹟考』には「西堂東堂二つ有」とある。文意がはっきりしないが、高雄神社はほぼ南面しているから、西堂というのは薬師堂、東堂というのは宵の宮のことであろうか。薬師堂の本尊は薬師如来である。参道の左右に大きなのぼ

り旗が立っているが、「高雄神社」と書いたもののほかに「薬師如来」と大書したものもある。薬師堂にも三柱の神が祭ってあって、中央が大国主命、左右が春日明神と応神天皇である。奇妙な組み合せであるが、大国主命の本地が薬師如来であるというのであろう。

本社の東側の小社を宵の宮という。宵の宮には猿田彦と天鈿女命が祭られている。この二神は通称ハナオッサマ（鼻王様か）およびオシッサマ（お獅子様）と呼ばれている。猿田彦が鼻高であることはわかるが、天鈿女命が獅子であるというのは珍らしい。高雄神社の獅子渡りというのは、実は高雄神社そのものの行事ではなく、この宵の宮の神事なのである。

なお、石段の下にある観音堂は、もと本堂の出村である松田にあったものを移したという。別宮の待手の宮は聖観音と伊弉冊命を祭るという。

図１　猿田彦の先導

お獅子渡御

本堂の獅子渡り神事の起源は明らかでないが、『越前国名蹟考』（文化十二）にすでに「祭礼の日獅子渡。此日飯をつくね投て、氏子ども拾ひ取事あり」とあるから、起源はかなり古いものであろう。

伝説によると、昔この地に怪物が住んでいて、人身御供として幼児を献じさせていた。たまたま猿田彦と天鈿女命がこの村へ来られ、その怪物を退治した。よって毎年この二柱の神を祭るのである。

一説によると、子どもがさらわれたのは四百年ほど前のことで、怪物の正体はムジナであった。おシシ様すなわち天鈿女命がこの怪物を追い払い、ムジナは高雄山へのがれたという。

天鈿女命は日本神話上有名な神であるが、この女神が獅子であり、しかも怪物を退治したというのでは、天の岩戸で裸踊りをした彼女のイメージと合致しない。しかし怪物を退治して殺したというのではなく、獅子の渡御により悪魔払いをしたのであると解すれば、この神事の性格が理解できる。

待手の宮の近くの路傍に死児の橋の小さな記念碑がある。昔はここに石の橋があり、人身御供の幼児とここで別れたから、その橋の名を死児の橋と称したという。しかしシニコとは本来別の意味があり、死児は単なる当て字のように思われる。

『福井県の伝説』（昭和十一）にはこの伝説を、岩見重太郎のヒヒ退治のように講談風に述べてある。それによると猿田彦の後裔と称する武士が、幼女の身替りになって、ムジナを退治したことになっている。だが地元の伝承ではムジナ退治

の主役はシシすなわち天鈿女命であって、猿田彦ではない。なお斎藤槻堂氏の『日本の民俗・福井』では怪物を大蛇であると書いているが、斎藤氏の思い違いであろう。

高雄神社の氏子は、現在は本堂町だけであるが、昔は西安居七ヵ村の郷社であった。七村というのは、更毛・本堂・羽坂・細坂・安田・北堀・恐神の七部落のことで、獅子は現在もこの七村を回り、昔子どもを人身御供にとられたという十二軒の家に立ち寄るのである。その十二軒の名は次のとおりである。

本堂　横山一義　　本堂　庭本吉次
本堂　佐々木弥右衛門　　本堂　佐々木喜次郎
本堂　加畑一吉　　更毛　西出
更毛　小林　　羽坂　牧野忠兵衛
細坂　田中右兵衛　　安田　森　由郎
北堀　定　裕明　　恐神　永井重一

このうち本堂の加畑氏は、子どもをとられた家ではなく巡行のさいの「雨やどり」であると称する。いずれにせよ、この十二軒が古くから神事に関係のあった家であろう。

神事次第

十一日夜、若い衆が集って、越前和紙の上等のものを切って御幣をつくる。これは猿田彦や獅子の髪にする。

十二日昼、昔子どもを人身御供にとられたという十二軒の家を、猿田彦の先導で獅子が巡行する。十二軒の家ではそれぞれオミキを用意して待っており、家の前まで出迎える。獅子は家の中へはいって、二十分ほどいる。各家では供米を出す。これをオカズマイという。随行の者がそれを集めて、後でむして握る。この小さく握った飯をオンモケ（オンモクとも）と呼んでいる。このオンモケは、夜待手の宮で皆にわけることは後述する。

夕方獅子は宵の宮へもどり、猿田彦は守護役の家に安置される。お宮をお守りする役の家は四軒ある。円光・堂下（二軒）・宮本である。猿田彦のお宿はこの四軒が毎年回り持ちで勤めている。

午後九時すぎ、区長の池田熊蔵氏と氏子総代の佐々木弥寿夫氏が、モーニング姿で威儀を正し、お宮まで獅子を迎えに行く。

図２　渡御の奉仕者

渡御の順序は、まず猿田彦が先導する。その後を獅子すなわち天鈿女命が一歩ずつゆるゆると歩いて行く。猿田彦は、御幣の紙で作った髪がふさふさといっぱいついていて、鼻高の面が小さく見えるほどである。この面を竹ざおの先につけて

高くかかげる。（写真一）同じく「猿田彦大神」と書いたちょうちんも高々とかかげる。猿田彦は先行してしばらく行くと、立ち止って獅子がゆるゆると近付いてくるのを待っており、獅子が近くまで来るとまた先に進む。

獅子の前には、区長さんなど役職の人が歩み、それからささ竹の綱をひっぱる子どもたち、それに続いて枝のついた長いささ竹をもった人、この竹の先の葉で獅子の顔をおおうようにしている。次に「天鈿女命」と書いた一対のちょうちん、そして獅子頭、その後に太鼓車が続く。子どもや太鼓打ちの青年は水色のはっぴ姿、獅子頭や猿田彦の面をかぶる人は茶紫の神衣姿である。（写真二）

ささ竹の綱を曳く子どもたちは、次の言葉を何回でも繰り返してはやしている。

サイヨリ、ミヨリ、イタデコデント、イコマイカ。シニコーハシヲ、コシタナラ、イカイチヲニギラセテ、ナンバミソイヤナラ、ゴットミソ。」

意味はやや不明である。「イタデコデン」は太鼓の音の形容で、「太鼓をたたいて行こまいか。死児の橋を越したなら、大きい乳房を握ぎらせて」ということらしいが、「ナンバミソ」以下は意味不明である。最初の「サイヨリ、ミヨリ」もわからない。

死児の橋まで来ると、行列はいったん停止し、猿田彦が頭を振り回して数回舞い、ついで獅子がものすごい勢で待手の宮の社内まで駆けてはいる。（写真三）

待手の宮では、猿田彦と獅子を一晩ここに安置する。待手の宮の天井の右の側に、狭いサジキのようなものが設けてある。ここへ若い衆が二、三人登り、先に述べたオンモケを手に握って、その手をサジキから下へのばす。すると人々はその手にとびついて、オンモケを奪いあう。オンモケの量は、あまりたくさんはないようである。『越前国名蹟考』には「飯をつくね投て、氏子ども拾ひ取事あり」とあるが、現状は投げ拾うという状態ではない。

翌十三日午後二時ごろ、獅子は高雄神社の宵の宮に帰る。その順序や方法は前夜とまったく同じである。ただ道順が逆なだけである。ただし昼だからよく見える。道の両側には村の人や近郷近在の人が見物しているが、和服で正装した女性が多くいるのに気付いた。

大門の所まで来ると、行列はいったん停止し、猿田彦の独演があって、ついで獅子が参道をまっしぐらに疾走する。

図3　獅子の疾走

付　記

ここの獅子頭および猿田彦の面は、かつて岐阜県安八郡安八町の結神社に盗まれたそうである。最近も村の人が結神社へ出かけて交渉したが、なにぶんずいぶん昔に盗まれたことで、ラチがあかないとのことである。